

核戦争の危機を生きるために、たたかう。

2017年12月12日
郵政ユニオン長崎、中島義雄

1、はじめに

昔、1960年代の映画『猿の惑星』を見た。チャールトン・ヘストンが演じる宇宙SF映画だ。宇宙飛行士の彼らは、現代の地球から出て、長い宇宙飛行ののち、地球への帰還をめざしている。飛行士たちが宇宙船のなかで冬眠するあいだに、地球は長い時間が過ぎ去っていた。計算上の地球時間は2673年であるが、ようやくたどり着いた地球は、人類がほぼ滅亡し、猿が支配する地球であったという物語である。あまり結論はよく覚えていないが、ただ印象深いシーンは、ニューヨークの平和の女神像が砂漠の中に埋もれている場面で、人類が核戦争で滅んだ1000年後の地球がそこにあったことだった。映画のころ核戦争の恐怖が現実的であったからだが、非常に衝撃的であった。

そして映画から半世紀がたった。いまおなじアメリカ発の核戦争の危機が、トランプ大統領のアメリカ・ファースト主義によって、今度は映画ではなく、まさに現実のこととして、再び訪れている。東アジアの朝鮮半島の核戦争の危機と、イスラエルとイスラムの戦争の再燃、中東の危機だ。私たちはこれにどう立ち向かうのか。これらを旧約聖書の世界や、日本流の世界第一主義=天皇制国家などから見てみる。

2、ノーベル賞と核廃絶とナガサキ

今年のノーベル平和賞は核兵器廃絶をたたかってきた平和団体のICANが受賞し、12月10日(ノーベルの命日)にノルウェーのオスロで開かれた授賞式で、被爆者(カナダの日本人女性)が歴史上はじめて記念講演をおこなったことが話題になった。日本政府はこの受賞に「核廃絶のゴールは共有」と菅官房長官が述べたが、苦々しい思いであることは、想像に難くない。また昨年(2017年)の夏、国連に行った「核兵器廃絶1万人署名活動・高校生平和大使」の代表の講演ができなかったが、そのときの日本政府の「不可解な態度」や、また核廃絶条約に反対したりすることと比べ、このノーベル平和賞の受賞と記念講演は「核は絶対悪」という立場で、「核廃絶」を明確に語り、世界に被爆者の強い意志を発信する、素晴らしいことだったと思う。当時では大量殺傷を可能とするダイナマイトで財をなしたノーベルの記念賞に、現代の大量破壊兵器であ

る核爆弾の廃止をたたかう人々が受賞することは、少し微妙で、複雑感もあるが・・・。

また10月6日、ノーベル文学賞を長崎生まれの日系イギリス人のカズオ・イシグロさん（1954（昭和29）年生、63歳）が受賞した。カズオ氏の母親が長崎原爆の被爆者で、彼は被爆二世だ。5歳まで長崎で過ごした彼は受賞の記者会見で、「私の母は2発目の原子爆弾の被害者であり、私はある意味、原爆の影の下で育った」と述べたそうだ。被爆都市・長崎への回想なのだろう。

私はこの文学賞の受賞式が行われるストックホルムのコンサートホールや市庁舎に観光で行ったことがある。赤レンガでツタが生え、荘厳な雰囲気だったが、中はただただ広く、床も色や柄が描いてあって、シャンゼリアもすごかったが、7月というのに北欧は非常に寒かった。ここで授賞式や晩餐会や舞踏会があるのだと思い、やはり上流階級の人とは違うな！との感想をもった。

今年のノーベル賞がICANの平和賞受賞と、広島市の被爆者の記念講演。そして長崎生まれの被爆二世の作家・イシグロの文学賞受賞と講演。この二つを見て、「そうだ、今年のノーベル賞は核兵器廃絶がテーマだったのだ」と、いかにぼんやりの私でも、ようやく気づいた。全く遅いが、たしかに世界は動いている。

そこで寄り道だが、イシグロの小説「遠い山なみの光」を開いてみる。戦後間もない1954年に長崎で生まれ、5歳まで長崎で生活した人が描くナガサキである。中島川での川遊びや街並み、稲佐山のケーブルカー、今も走る路面電車などが作中に出てくる。名前が出てくる人は従弟で、私の田舎の実家のすぐ近くで、現在は動物病院を開業している人だ。その方はイシグロの受賞で、お祝いのコメントを朝日新聞に載せていた。いまでも親戚なのだ。

小説では、「長崎はすでに色とりどりの夜の光にあふれていた。夕方近くに稲佐をあとにしたわたしたちは、浜屋デパートの食堂で夕食をすませた・・・そしてのんびりと路面電車の停留所へ向かった・・・」などと、長崎の戦後の原風景が描かれている。話はローカルだが、私はその稲佐山の中腹に住んでいる。浜屋デパートは長崎市に唯一残るデパートで、屋上には幼児用の遊園地がいまもある。昔、子供が小さいころ私たちの家族も、この食堂でお子様ランチを食べたし、回転飛行機に子供を乗せて遊んだ記憶がある。この長崎がイシグロの原点なのだろうが、描かれた長崎はいまでも昔も変わらない。

ともあれ被爆地・ナガサキ、聖地・ナガサキ、被爆二世のイシグロというコンセプトで、イシグロが文学賞をとったかは、文学作品の評価に疎い私なのでわからないが、長崎人にとって急にノーベル賞が身近に感じられたのは間違いない。こんな世界的にすごい人が、長崎の同時代に生き、この狭いごみごみした空気を、共に吸っていたのだ、という思いが感じられたからだ。まあ、田舎

者の身びいきなんだが。

外国人でも日本人でも、長崎というと原子爆弾の被爆地で、今でも市民の多くが平和活動に熱心だと思い、聖地はすごいというが、これはすりこまれた伝説と誤解にすぎない。地元では反戦・平和を掲げる長崎地区労は少数派だし、県労連はもっと少数派。さらに、運動論で原則論をいう郵政ユニオン長崎などは、もっともつとごく少数の労組に過ぎない。たとえば郵政ユニオンが今たたかっている労契法20条の裁判でも、「非正規が正社員になると会社がつぶれる」とか、「会社倒産運動」として、無関心の人が多い。会社も隙あらばユニオンを「つぶそう」と躍起になっている。

そんな長崎は今も昔も三菱城下町で、軍需工場の町である。(だから米軍は原爆を長崎に投下したのだが)。長崎人の数人に一人は下請け、孫請けもふくめての三菱関係者で、石を投げれば三菱関係者に当たり、町中の飲み屋では三菱の悪口は言ってはならない、という土地柄である。この三菱はいまも兵器や軍艦を作り続けているし、市街地のど真ん中(浦上駅のすぐそば)に兵器製作所の広大な敷地の工場があり、誰も近寄れない機密の場所もある。ここの労組は昭和40年代に大分裂をおこし、いまは旧同盟(現在の連合)の最大拠点でもあり、長崎県の労組のトップに君臨し続ける。ちなみに旧総評系の左派労組はもう現役はいないし、第三組合の長船労組は三年前に解散した。また職場は世界一のもの(兵器)を作ろうという雰囲気でもある。

また被爆者でも右翼はいるし、二代続けて市長が右翼に襲撃された土地柄でもある。被爆地という意味でいうと聖地だが、聖地に住んでいるからといって聖人ではないし、被爆者だから核廃絶でもない。思想と行動は経済に支配されるし、平和だけでは「食っていけない」と考える人が多いのだ。彼らには軍需工場も兵器生産も原爆被爆とはつながらない。

3、核兵器廃絶以外に世界の恒久平和はない

このノーベル賞受賞を見るまでもなく、いま世界は核戦争の危機にあり、これに反対する人々の「核兵器廃絶」と核保有の大国との対立が続く。ノーベル平和賞の授賞式には、核保有国の大使級らは不参加などとも報じられている。また国連で核兵器禁止条約が提案されても、核保有国は「非現実的」「核抑止力がなくなる」という理由で、核廃絶条約に反対し、また原爆被爆国である日本ですら賛成しない。

彼ら核の保有国は傲慢で強気だ。アメリカいわく『北朝鮮が核兵器で攻めてくる時代に、核兵器反対は非現実的』という。たしかにそうだろう。

しかし私はこれに異議を唱える。北朝鮮の核兵器開発は10年ほど前のことだ。

核廃絶運動は70年をこえる。当時は北朝鮮など関係なかった。この論理だけなら、核はこのとき廃絶ができたはずだ。だからこれは口実だ。

原爆の歴史的経過だ。1945年7月16日に、アメリカは三発の原子爆弾を作り、一発は核実験に使った。この日はポツダム会談の日だったが、すでにドイツは5月7日に降伏していたから標的は日本であり、7月26日に日本へポツダム宣言の降伏勧告がだされる。日本はこれを無視し、そして10日後の8月6日に広島に二発目の原爆が投下され、三発目は9日に長崎に投下され、二つの都市で30万余の人々が一瞬のうちに殺された。亡くなった人たちは、非戦闘員のただの市民であり、「なぜ」という思いもないままに、死んでいったのだ。それ以降、70数年間、私たちは核兵器反対をいってきたし、廃絶をたたかってきた。

歴史的に言えば、10年前は北朝鮮の核兵器はなく、その脅威もなかった。27年前の社会主義のソビエトは消えたとし、そのときも核廃棄はできたはずだ。中国はあったが、そのころの中国は力もなかった・・・であれば、これは永久に核は廃絶できないということになる。

だから本音のところ、核兵器保有国は核による脅しで、世界の支配を考えている。そのために自らの軍事的優位性と特権を永久に手放したくないだけだ。もっといえば、国家存立と国の自衛権を口実にして、核なしに、これを維持できないと考える。核兵器保持の理由はなんでもいい。「ただ、相手が持っているからだ」というだけでいい。

だから自国の平和と世界平和のために、自らが核を持つという核保有国の論理は、身勝手すぎる「唯核史観」なのだ。考えてみよう。百歩譲って、核で自国が守られているという人は、それでいい。しかしそれは、圧倒的多くの非核保有国の国民の頭上には、毎日毎晩、核爆弾がぶら下がっている「ダムクレスの剣」状態を意味する。他人の恐怖などお構いなしの世界は、おかしいだろう。

この唯核史観は人類の生存を否定する論理であり、認められない。平和の第一歩は不安なく生きることである。核兵器は地球上最悪の殺人兵器で、この正反対である。いったんこれは使用されれば、大量の人が殺される。地球上に逃れる場所はない。だから核兵器廃絶なのだ。これこそが、平和の原点であることを、被爆二世、三世、四世を家族に持つ私は譲らない。

そこで長崎、広島での核被害の実態で一言。こうした歴史的な大事件は、必ず評価が分かれる。ましてや被害にあった当事者=第一世代が亡くなってしまえば、反対派からは被害は誇大だとかの批判を浴びるし、歴史的には証拠がないともいわれる。加害の側の歴史修正主義者だが、安倍首相や小池都知事が南京大虐殺や朝鮮人虐殺などの評価を、「歴史家に任せる」として、事件性や加害を否定

する。あのドイツでもユダヤ人虐殺のホロコーストを否定する論理が台頭し、裁判が続いているともいう。

そうしたなか、残念なことだが、被爆第一世代の長崎の証言者が次第に亡くなられていく。谷口稜暉(すみてる)さんは郵便配達途中に被爆され、その後、反核運動の先頭に立ってこられたが、この夏 88 歳で亡くなられた。また日本の先の戦争加害を記録する岡記念館の高實康稔理事長も、5 月に 78 歳で亡くなられた。第一世代がいなくなれば、歴史は過去となる。原爆被爆でも「なんでもなかった」かのような風評が出始める。だから、被害の実態や数なども、そうした「過去」とならないよう、記憶し続け、たたかいたいと思う。

4、人類と戦争

人類の戦争の歴史はいつごろからか。日本史的にいえば、人類に集団農耕が始まり、村を形成する弥生式時代の紀元前 3 世紀ころからだ。この時代の地層から出土する人骨に、刃もの傷跡があるからだ。世界史的には紀元前 30 世紀ころのエジプト王朝が国家の始まりとされる説があるから、すでにこのころは起きていたと思う。文字に残る史実では、紀元前 1800 年ころのハンムラビ法典の時代が初めだが、それから 500 年ほどのちの旧約聖書の世界、紀元前 1300 年ころが明文の史実となる。いずれにしても人々に富をめぐる争いが生まれ、紀元前 1000 年ころから武器が石器から鉄器となり、戦争が大規模となり、広い地域での戦争の時代となり、世界に帝国が作られる。

日本での国家形成は 3 世紀ころの卑弥呼の時代をへて、統一国家の天皇制国家(大和朝廷)ができる。神話の世界では紀元前 660 年ころで、神武天皇が初代とされるが、確かな史実がない。

有史の書をいうなら 720 年に日本書紀が編纂される。中国風に漢文で書かれた日本最古の国による正式の歴史書だ。これと比し、712 年の古事記は単なる物語である。漢文でもない。3 世紀に書かれた中国の歴史書の「魏書」の魏志倭人伝に、日本に関する邪馬台国の記述が見えるが、このころまだ日本には文字がなく、確証もされない。その後、6 世紀ころ仏教や千字文(漢字)が伝来するが、日本書紀はさらにこれから 200 年もあとのことである。だから日本の文字として残る歴史は 7~8 世紀からということになる。

天皇制の始まりと元号は並行していない。史実として天皇即位の年代が明らかなのは、601 年の推古天皇説(日本書紀では第 33 代天皇となる)があるが、聖徳太子(厩戸皇子)が摂政となったころだ。それ以前も実在の天皇はいるようだが、例えば 479 年の雄略天皇、507 年の継体天皇など、それぞれの記紀にはあるが、詳細は分からない。元号制度は中国にならうが、この最初は 645 年

の乙巳の変（以前は大化の改新といったが）の年の「大化」が始まりである。日本書記でいうと、そのときすでに天皇は36代目を過ぎている。それまではだから元号なしの天皇制だったこととなる。

5、元号と天皇制

2019年4月30日に現在の天皇が退位し、平成が終わり、5月1日から126代目の天皇が即位し、新元号となるという。（当初、すぐにでも生前退位が実現するかのようだったが、なぜか退位希望表明から二年も先送りとなった・・・）。元号とは天皇が時代区分として自分の暦（年代）をつくることだが、明治以降は天皇の一世一元とされている。大正天皇が亡くなるとき、次の元号は「光文」と決まっていたが、毎日新聞にすっぱ抜かれて、ときの内閣が「昭和」に変えたという話が、井上ひさしの「私家版、日本語文法」に書かれている。ネットでは諸説があるが。

では昭和とはなにか。和は大和の国で、昭は「隅々まで照らす」である。意味はこれで分かる。出典や語源は中国の四書五経の書経堯典の「百姓昭明、協和萬邦」にあり、尽きるところ、「世界平和」を意味するが、時代は逆に歴史上最大の第二次世界大戦が起こる。昭和はまさに戦争の元号となった。

ところでその次、いまの平成だ。「平和に成る」という意味だといわれるが、この名前はどうか。日本の元号はこれまで246個ある。大化以降の天皇は90人だから、一人の天皇に3つ弱の元号がつく計算だ。いかに政権争いの内乱や、天変地異などで改元が多発したかがわかる。

日本史で平氏の存在は大きい。天皇の位を篡奪しようとした武家政権の始まりであり、平清盛こそ逆賊という歴史観もある。元号名では「平〇」と使われたものは、平家全盛の時代の「平治」（1159～60年の一年間だけ）のひとつしかなく、平家滅亡の後には、現代の平成まで元号には「平」の字は皆無であった。その点では平成と決めた内閣と国学者の歴史認識と意図はどうだったのだろうか、不思議にも思う。

源平の合戦の平家滅亡のとき、わずか6歳の安徳天皇（清盛の孫）を、壇ノ浦で入水させ、また三種の神器（剣、鏡、玉）も海に沈めた（捨ったという説もあるが、それ以降、天皇もふくめて誰も見ていない）、大罪人としての平家一族は、国史的にも嫌われていた存在で、「平」という漢字もそういう位置づけだったのだろうか。

また、天皇制が武家政権時代は名ばかりの時代だったことは、その石高でも明白だ。織田信長がときの天皇（正親町）に3万石の石高としたし、徳川幕府3

代将軍・家光が、ときの後水尾天皇に 2 万石としたと歴史書にはある。徳川家の石高は公称 800 万石（国の 3 分の一を独占していた）とされるから、その差は歴然だ。また 2 万石とは小さい大名クラスの石高である。また、江戸時代のはじめの 1627 年（寛永 4）には、天皇のもう一つの権威の象徴である僧侶への法衣任命権、官位任命権を将軍が奪った「紫衣事件」がある。これは天皇が僧侶に位を与えることで、天皇の権限と財政収入の源となっていたが、このときの発令に対して、幕府が「事前の了解がない」としてこれを取り消した事件である。後水尾天皇はこれに不満を示し、生前退位をした。無論、年号も幕府が勝手に決め、外交権も将軍が国王を名のり、内政権も将軍が握ってきた。このように武家政権の 700 年間は、形ばかりの天皇制が多かった。

日本の近世と近代に天皇制が「君主」として存在するのは、やはり明治維新からとなる。150 年前だ。この思想は八紘一宇であらわされる。日本書紀が由来だが、天皇を長として世界をまとめるという、いま流でいえば天皇ファースト主義だろう。ともあれ、日本の神であった天皇が時代を区切ることで、世界制覇をめざすが、世界の暦と時代環境を変えることはできなかった。

6、戦争と末法思想

では、現代の核戦争を伴う第三次世界大戦の危機は、どういう背景なのだろう。それは間違いなく、アメリカ・ファーストを掲げる新自由主義のトランプ大統領がいう、アメリカだけが損をしてきた世界経済構造を、アメリカだけが儲かる形に再編をする、経済と政治と外交の延長線上に摩擦と対立が生まれ、軍事的緊張が高まり、核戦争の危機が近づいてきているのだ。まずは東アジアの朝鮮半島の核戦争の危機だし、年末の 12 月 6 日にアメリカがイスラエルの首都をエルサレムと宣言し、大使館も移転することで、世界的に緊張が高まっている。

1991 年に社会主義のソビエトが崩壊し、東西冷戦が終わる。勝利者のアメリカは唯一の覇権国家として君臨するが、経済の破たんは明白で、2008 年のリーマンショックで、世界大恐慌を招いてしまう。経済も財政も破綻した赤字の大国アメリカの現状に、以前の力などない。思えばこの 1991 年は湾岸戦争の開始という出来事と重なっており、世界的な転換の重要な時代だったのだと改めて思う。

こうした実態から世界の覇権国家としてのアメリカを復活させるアメリカ・ファーストは、既存の構造を否定することから動き出す。当然それまでの世界秩序を土台から崩すことが、彼らの「改革」であり、安倍首相らがいう戦後体制の一掃としての「革命」なのである。これが新たな矛盾と対立の根となり、

ついには核戦争という破滅の道と重なり合う。

核戦争は地球世界の破滅であり、人類の生存も勝者もなく、みんなが敗者なのだ。こうした社会危機のときは宗教的には末法思想がはやるし、また自分たちだけは生き残るのだという思想も流行する。今から 1000 年前の鎌倉時代に仏教での末法思想が起きた。これは釈迦の入滅（紀元前 483 年）以降、長い時間がたつと仏教が軽んじられ、社会が大混乱し、時代が終わるという思想だが、その節目がこの時代にあたるとして、社会に不安と動揺がおきる。

それまでの日本の仏教は比叡山・延暦寺に本拠があり、最澄や空海が起こした真言宗、天台宗などであったが、それは天皇や貴族たち、あるいは修行と学問を積んだ僧侶のための特権的なものであった。当時の国民は字も読めず、経文も知らず、寄進する金もなく、結果として仏にすがろうにも、このままでは死後は地獄に落ちるしかない状態であった。

そのとき法然（源空）が「そんなことはない。ただ人々は南無阿弥陀仏の念仏を唱えることで、誰でも極楽に行ける」という専修念仏の大乗教的な万民救済の浄土宗を起こす。法然は、出家もせず、厳しい修行も不要として、僧侶には妻帯も認める。いわば「人間の顔をした仏教」を提唱したのだ。これが国民の支持を受け、浄土宗が多数派となっていく。そのことで法然は、貴族や当時の仏教界のトップ（比叡山・延暦寺派）から訴追され、幕府は専修念仏を禁止し、騒動を起こした罪で法然は讃岐へ流刑されたり、死後も墓を荒らされたりする迫害を受ける。

しかしこの法然の宗教改革は進んだ。下層階級の貧乏人に末法思想から転じて、夢と希望を与えたからだ。（現実の貧困は宗教は解決できなかったが）。ドイツではいまから 500 年前、「金持ちのためのキリスト教」を批判し、宗教改革を唱えたマルチン・ルターがいたが、法然のそれは、ルターよりさらに 500 年も前であり、法然は今でいう「改革派」だった。そして宗教的な末法思想は、いつの間にか通り過ぎていく。

7、現代と旧約聖書に見る歴史観

そして現代の、世界的な再編での戦争の危機と、いまのありようである。

戦後、民主主義的な社会福祉国家は、ブルジョワジー（富裕層・資本家）や労働者の戦争の反省と、社会主義思想との妥協として生まれた。しかしその多くは財政的な行き詰りから、福祉政策などがとん挫し、民主主義そのものが「改革」の敵対者として現れる。（本当は富裕層がタックス・ヘイブンなどで税金を国家へ納めないからの財政赤字だが）。

1980年代に新自由主義経済が生まれる。政治的にはサッチャー、レーガン、中曽根らが「構造改革」を掲げて登場する。それは国営企業の民営化と金融資本主義であり、赤字解消、一層の競争原理をとらえ、むき出しの強欲資本主義であった。これはそれまでの民主主義を政治的手法とした国の土台を揺るがす、まさに300年ぶりの反動の時代を意味した。

しかし金融資本主義は2008年のリーマンショックという世界大恐慌(金融恐慌)を招き、経済、財政の危機がますます深まる。グローバリズムの政治、経済から、新たな価値観と戦争を伴った排外主義の自国第一主義思想に、人も国も変わる。当然、政治、経済も変わる。経済学者の水野和夫は現代を指して「資本主義の終焉」を公然と語り、500年ぶりの危機をいう。

そこでは、人はみな平等とか、思想や信仰の自由、反差別とかの共生の思想、あるいはまた、それを支える法と権利を、グローバリズム的に考える枠組みも否定される。18世紀、中世が産業革命とともに終わり、ブルジョワが台頭し、君主制を否定し、市民とか権利思想が生れたあらたな国家(フランス革命やアメリカ独立革命)などの、初期の民主主義的な自由主義思想をふくめて、これらはトランプの出現と同じくする極右による自国第一主義(排外主義)に道を譲り、軍事的には核戦争も辞さずという、対立と戦争の時代が到来している。日本でも北朝鮮からの武装難民がくれば、いっきに混乱が深まり、もっと排外主義へと劇的に変わると思う。これに比し、ヨーロッパはテロに耐え、難民を受け入れるなど、排外的な民族派に対抗して、民主派はよく頑張っている感じがするが、私たちに持ちこたえることは可能だろうか。

では、この自国第一主義という国家主義で、この歴史の反動はいったいどの時代まで「もどる」のだろうか。第一主義とは最初は国家レベルでのそれをいうが、都民ファーストをいう小池都知事にあるように、これは国内政治でもありうるし、これはさらに細分化、先鋭化する。結局のところ最後は自分第一主義に純化する。このファースト主義はいまのところは一応選挙による勝者だが、この政治思想が政治的勝者になると、それまでの民主主義は成立しない。民主主義は「みんな」が基礎であり、第一主義の基礎は「自分」である。この両者は並立しない。わかりやすくいえば、たった一人の勝者以外は、ファースト主義では存在が許されない思想である。最後まで厳しい争いが続く政治理念で、平等とか和平とか互惠とかは、入り込む余地のないどこまでも競走原理の資本主義なのだからだ。

当然、アメリカ・ファーストの自国第一主義は、トランプがいうように、自国の利益に反する国とは、利益をめくり戦争も辞さない。それは新自由主義特

有の新たな政治と核戦争を伴う経済論で、その上にある政治・戦争論である。これは現在の北朝鮮との異様な対立と、過去にない異様な挑発的言動からおきる軍事的緊張の高まりを見ればわかる。また、イスラム世界の反発があるなかで、イスラエルのエルサレムの首都宣言では、歴史を2000年以上も逆転させる政治思想にその起源がある。時間を2000年も戻して、その大義と利害を争う歴史観は、まさに神話の世界の戦争史観である。世界ではイスラムの反乱やテロ行為を原理主義と呼んだが、今このテロとの戦いを掲げて、時計の針を2000年も戻す歴史観は、ユダヤ原理主義と評することができようか。

そこでほぼ3400年前にモーゼが書いた旧約聖書の最初の「創世記」から、その歴史観をみってみる。

神の世界から追放されたアダムとイブが人間世界をつくり、人が増える。その子孫が世代でいうと10代を過ぎるころ、人は墮落し、神のいうことを守らなくなる。神がこれに怒り、地球世界に40日間も雨を降り続けさせ、地球上を洪水にして、人類の滅亡という罰を下す。しかしノアの家族だけは信仰が厚かったため、神の言葉に従い、方舟に乗り、生き残る。この生き残りの家族=ノアの子供の長男がセム族でユダヤ人であり、二男がカナン人でパレスチナとなり、三男がヨーロッパ語族となり、そこで新たな世界ができる。紀元前1300年ころとされる。3300年も前のことだ。そのとき神は、人が神の教えを守る限り、もう人類滅亡というような大洪水は起こさない、と約束をする。これが、人類が神に従うという約束をした古い約束で、いわゆる旧約聖書である。

しかしそれからまた1000年がたった。ふたたび人は神との約束を忘れ、神を信じなくなり、傲慢となる。そして天にも届くバベルの塔を作ろうとする。神はまた怒り、今度は彼らの共通の言語を乱すこととした。もともとは同じ家族であり、言葉も思想も相互に理解もできたのだが、この「天罰」で人々は政治的にも社会的にも、言語や思想の共有ができなくなり、相互の理解が不能となる。

これはドイツ語と日本語という違いではなく、思想や主義が分裂し、同じ言葉を使っても、理解ができない=対立を意味する。現在の日本の政治でも、与党と野党のいうことが、同じ言語でありながら、方向がまるで反対であることなどがあるが、これを指すと聖書の解説本(生田哲の「聖書」から)には書いてある。現代のトランプの政治用語でいう「なにが真実か」や「フェイク・ニュース」などをいうのだ。ともあれ、これで世界は統一できなくなり、対立が以降2300年間も続いていることとなる。これが旧約聖書の歴史観である。

8、現代版・ノアの方舟、核シェルター

今回のアメリカによるイスラエルの首都のエルサレム宣言と大使館移転は、この神話の世界、しかも旧約聖書の世界の思想と政治が、現代にまるごと再来する歴史の大反動なのである。もともとノアの家族の息子=三兄弟が人類の始まりであり、その子孫がユダヤ人やイスラエル人、欧州人となったのだから、言語も思想も理解できていた。その彼らが、その後のさまざまな出来事で聖地を奪い合うなどの戦争の時代となり、そしていまそのことが、新たな核戦争の引き金ともなろうとしている。

3000年の昔の神の怒りに対して、ノアの家族は方舟で生き残り、ユダヤ民族の祖となる。イスラムの民も同じ祖だ。そして今は、この核戦争の時代に、核シェルターでユダヤ民族だけは再び生き残る民だと信じているようだ。選民思想だ。聞けばこの国では全国民に防毒マスクが配布され、多くの家には核シェルターが作られているともいう。ノアの方舟の現代版であるし、また彼らはそうした神の信仰とともにあるのだろうか。

ただ宗教のために付言したい。私は非宗教者なので、このような一知半解の宗教論を書いているが、無学はお許しいただきたい。その上である。戦争は宗教の違いと対立で起こるのではない。戦争の起源が富の分配と争いであることはすでに述べてきた。また二度の世界大戦も、植民地の再分割支配のためであることも述べてきた。いずれも戦争の動機と宗教とは無関係である。

今回、世界がいかにも宗教がらみのようにイスラムの戦争をいうが、これは違う。先進的資本主義=帝国主義の植民地支配による富の収奪（原油の買ったきなど）による貧困への反乱と怒りであり、あくまで戦争の根は経済なのである。これは歴史的事実として断言したい。

そこでいままた、日本でも自民党が核シェルター建設をいっているが、これは絵空事にしかすぎない。日本でも核シェルターは現代版・ノアの方舟とはなりえない。1853年、幕末のペルー来航のとき、国学者のトップで攘夷論を自称していた佐久間象山が、反撃として、「アメリカへ紙の風船爆弾を飛ばせ」と幕府へ建言したことは有名であるが、まさに笑止、無知である。敵は蒸気機関で軍艦を動かし、鉄製の大型爆弾の大砲を備えて、大西洋、インド洋を回ってきた2000トンクラスの米軍艦である。手漕ぎの船か、せいぜい500トンクラスの千石船しか持たない日本の海軍力、青銅製で鉄の弾しか飛ばせない大砲術の非力さを知らぬ、国学者は井の中の蛙であった。結果、薩摩藩も長州藩も英仏な

どと戦争をして敗北し、開国派に転じる。

それから半世紀後、日本はこれに懲りずに、また太平洋戦争中に、日本の国家予算の3年分の予算(20億ドル)を投じて原爆をつくり、投下したアメリカに、竹やりで立ち向かへ！と命令した日本の軍人や政治家=帝国主義者の戦争論や、国防、国民を守る思想は、またまたこの程度である。

いま北朝鮮などの核兵器攻撃に対して、避難訓練が全国で始められているが、机の下に潜れとか、マスクをつけろとか、ヘルメットをかぶれとかいう原爆投下への避難訓練など、役には立たない。国はただただ、危機意識を国民に煽る手段として、訓練をくり返しているのだ。この非難訓練を全国で最初に開いた南島原市の訓練を実際に見てきた市民団体の友人は、自衛隊が銃をもってこれに加わるのだそうだ。自衛隊への抵抗意識の慣らしと、銃への抵抗感をなくす訓練でもあると、その人は怒っていた。

ともあれ、核シェルターは一発目の核兵器での生存はどこの国でも可能かもしれないが、実際に公開で実験した人はいなく、効果のほどは不明である。かりに実際に北朝鮮に先に撃たせないための先制攻撃で、アメリカが数発の原爆を北朝鮮に投下し、北朝鮮を壊滅させたとしても、それは最後の勝利ではない。また北が一発も撃たないまま崩壊するというのも全く非現実的だ。さらに世界にはまだロシア、中国などの全9か国に核兵器は2万発を超えて存在する。彼らが自国防衛と称して、日本やその他の米軍基地などを攻撃しないという保証はどこにもない。ましてや一度使われた核兵器は、核不使用の抑止力の論理とはならない。また先制的に核兵器の使用はしないという紳士協定も、二発目には適用されない。これが第三次世界大戦の論拠となっている。

北も自国の核兵器がアメリカの核兵器で破壊されないように備えることは、当然予測できる。間違いなく、一発目の発射に対して即応するだろうし、さらにはその翌日か、あるいはまた一週間後かに、隠し持っている核兵器を再度撃つだろう。これは戦争の常識である。またかりに負けたはずの北だけでなく、そのほかの国からも二の矢、三の矢が日本の米軍基地などに飛んでくることも予測できる。その原爆の数が、地球をなんどでも破滅させる規模の核兵器であることは、誰でも知っていることで、地球の破滅は明らかだ。

イスラエルも自ら80発近くの前爆を保有している核保有の危険な国である。核が中東で使用されない保証はなにもないし、反撃もあるだろう。イスラエルも自国民は核シェルターで一発目の核兵器では生存ができるだろうが、かりに一週間、一カ月後に平和になったと思って地下から出てきた途端、多くの核兵器が再び飛び交う次の戦争の時代となれば、生存は保障されまいし、それ以外

のどこの国民、民族も生存などできない。そもそも神の名でこうした核兵器の使用などという蛮行が許されるはずもないし、聖書にいう歴史観でも許されるはずはないが、戦争論はこれを踏みつづすし、彼らは歴史に学んでいない。

9、核は人類と共存できない

さらに旧約聖書でいえば、神を恐れぬ人の蛮行の象徴がバベルの塔の建設にあり、神が天罰として、世界人類を分断したことを真似ていえば、聖書にいうバベルの塔建設は、現代の原子力発電所の乱立であると思う。放射能を生むウランやプルトニウムは地球内部に存在する物質であり、地球を作ったものが神であるとするなら、ウランも神が作ったこととなる。しかし、これはいったん核融合し、放射能となれば、人類が制御することは不可能となる、まさに人智の及ばない異様な物質である。

地球のエネルギーの源は太陽光である。しかし人類がかつてその有効的な利用を知らない時代は、木材や鉱物（化石燃料）にそのエネルギーを求めた。そして20世紀、人類はついにウランへと手を伸ばした。それが原爆であり原発である。しかしこれは人類とは共存できない代物である。

核兵器はそれ自体で世界を破壊する威力をもつが、いま世界中に建つ原発は、通常兵器でも破壊できるし、わずかなテロ行為でも破壊工作は可能であり、そこでの核爆発は、放射能で全地球を覆い尽くすことは間違いない。核兵器廃絶は核兵器に勝つ新兵器を発明することだと恐ろしいことをいう人もいる。ドラえもんの発想でいうと、自らは他の宇宙へ避難し、一発の武器で地球を壊滅することなどだろうが、今のところそれはない。

ノアの方舟での天罰は、全地球上を水に沈めた大洪水だったが、それは40日で水が引き、全生物の死滅の危機は過ぎ去った。しかし原発がまき散らす放射能は、半減期が数万年という気が遠くなる時間が必要なものもある。危機は万年の単位で続くのだ。わかっていることだが、人類は出現からたった100万年ほど、有史でいうと3万年ほどである。日本の国家が生まれたとする日本書紀の紀元からも2678年しか経っていない。とても放射能の半減期には時代的、歴史的、科学的にも数学的にも追いついていけない、まさに天文学的な数値とレベルなのだ。数学的な問題でいうとゼロを1億個ほどの単位を一つと考える新たな数学式や物質論でアインシュタインを超える。さらには太陽系や銀河系宇宙を飛び越える理論や、対放射能の免疫医学を成し遂げる以外に、人類の生存は不可能である。かつて有名な映画監督が「みそ汁を飲めば、放射能は解毒できる」といったが、72年前の原爆投下のころの長崎の人は、みんな例外なくみ

そ汁を飲んでいたが、被爆した人の多くは放射能で殺された。放射能の前で生存は空論であり、死のみが実理なのだ。

さらに、核爆発は神が行う天罰ではなく、人がいま持つ強欲資本主義 = 自分ファーストの政治、軍事的な戦争の結果、人為的に起きるものだ。まさに人の手による人類破滅の危機なのである。これは人が理性を持てば避けることができる危機と戦争なのである。また人が行う行為には意図と真逆に、悪意もあるし、失敗もある。また善意でもあっても偶発性もありうる。核戦争の危機は本当にそばにあるのだ。どうして同時代に生きるものとして、これらを看過できようか。

もう一つ。自分だけ儲かるという自国第一主義 = ファースト主義は、人は神のもとにすべて平等であるという天地創造の大原則を否定する、社会と共存できない異常な政治、経済学である。すべて生物の進化は競争原理にあることは理解できるが、人の歴史はいかに公平となるのかで、差別とのたたかひのくり返しでもあった。ファースト主義はこれに逆行する思想だ。

神は6日間で宇宙と地球と全てを作り上げた。その作業はまず一日目に全宇宙を作り、以降、光や地球や水などをつくり、最後の6日目に人を作られたと聖書にはある。神の意志で人はできた。その人が同じく神が作った地球を破滅させる愚挙を行おうとしている。これこそ神は許されるのだろうか。

10、戦争の時代にたたかった先達に学びながら

トランプ大統領が行っている様々な排外主義的諸政策に、ローマ法王は遺憾」の意を表明している。しかし敬虔なキリスト教徒だと公言するトランプは、法王のいうことも聞かない。そもそも法王は神ではない。教会のトップという存在でしかなく、信者は聖書のみに従うという原理主義でもいいのだが、聖書だとしても神の声を聴いた預言者の言葉である。モーゼもキリストも神の言葉を聞いたというだけである。預言者の時代（過去）には核兵器は確かになかった。そうしてみると、現代の神はこの現代に存在するとしたら、核戦争の危機をまえになにをいうのだろうか。

小説「沈黙」の世界で、作家でキリスト教の信者の遠藤周作は、禁教下の日本に潜入し、長崎奉行所に逮捕され、穴釣りの刑の拷問死か、棄教かを迫られる司祭・ロドリゴの苦しみを語る。踏み絵を迫られ、まさに生死の境にある司祭が、神の「沈黙」に「なぜ」と問うたとき、銅版の人（神）は確かに『踏む

がいい』といった、と語らせる。神が踏み絵を許したというのだ。これにローマ教会は怒ったし、この作品を否定した。しかし、人が生きるための行為としての「踏み絵」は、宗教を超えて許される、という遠藤の思いが、本当の神の言葉だろうと思う。その意味では神は沈黙などしていない。遠藤周作は神の上に生をおく。現代における預言者的な「生存の原理」を語ってはいないか。宗教家には申し訳ないが、神が人を作ったのではなく、人が神を作ったのだという論理にも聞こえる。

最後には神の言葉や予言めいたことを書いたが、国と国民の破滅という危機の時代に、戦争と軍人の論理が強くなることは歴史の教えるところだ。こうした全地球的な核戦争の時代に労働者として、人としてどうたたかい、どう生きるのか。これを問う人たちの運動論や組織論で、破滅的な末法思想ではなく、ましてや現代の預言者的な宗教的な思想でもなく、戦争に反対する人として、たたかって生きていく。戦前に抵抗した私たちの先達は、未来の戦争ではなく、現に起きている戦争の真ただ中でも、非戦、反戦を貫いた人もいた。一人一人は弱い個々であるが、戦争で人を殺さない。そして自らも生きる。これが一番大事だと信じ、生きていきたい。